

1. アイヌの植物観

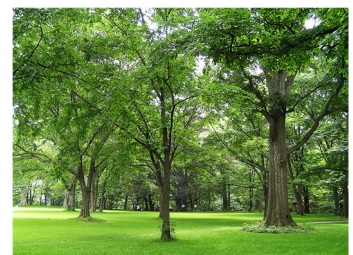
2020年度の植物園だよりでは、北海道の先住民族であるアイヌの人々がどのように植物とかわかってきたのかを紹介します。なお、今回紹介する内容は、過去に記録された情報（先行研究）です。アイヌの植物利用には、時代の変化のなかで現在は実践されなくなったものもあれば、現在にまで継承され今も実践されているものもあります。また、アイヌ文化の再活性化が進むなかで、たとえ現在は実践されていなくても将来復活するものもあります。

「アイヌ」とはアイヌ語で「人間」を意味する言葉です。19世紀中頃まで狩猟や漁撈、採集、農耕を主な生業としてきたアイヌは、北国の厳しい自然と調和して暮らしてきました。知里真志保の『分類アイヌ語辞典』によると、アイヌの人々が有用であると考えていた植物はおよそ470種類あります。それらを、家材、舟材、燃料、衣料、食料、飲料、薬、呪術、儀礼、遊戯など多様に利用し、有用部位を、根、茎、葉、樹皮、草皮、果実、幹、枝というように細かく分けて、それらの使い分けをしていました。アイヌ語の植物名が生活と関係のある部位ごとに呼び分けられていたことから、アイヌの生活が自然と密接にかかわっていたことがうかがえます。

アイヌの人々は、人間以外の身の回りの多くのものがカムイ（神）であると考えています。カムイは神の国では人間と同じような生活を営み、神の国から地上の人間の国においてくるときに動物や植物の姿になります。したがって、草や木が生えているとはいわず、座っているといます。木を1本だけ伐るときであっても、丁寧に神にお祈りをし、捧げ物を供え、感謝の気持ちを述べます。

更科源蔵の『コタン生物記』には、最初に地上においてきた植物がハルニレとイチイ、オオヨモギであったというアイヌの神話が紹介されています。ハルニレは火の神を生んだ女神とされ、最高位の尊い神として敬われています。アイヌの人々はチキサニ（我ら・こする・木）と呼んで、火を起こすのに用いたり、木の皮の繊維を糸にして利用しました。イチイはアイヌ語でクネニ（弓・になる・木）と呼び、狩猟や漁撈で用いる弓や漁具を作る材に用いたり、繊維を染色するのに利用したりしたほか、果実のようにみえる赤い仮種皮を食用にしました。オオヨモギはノヤといい、そのにおいと薬効によってさまざまな病魔を防いだり治したりすると信じられていました。これらの植物は、どれもアイヌの人々の生活に欠かせない特別なものでした。

次回からはアイヌと関係の深い植物について、その特徴や利用方法、植物に対するアイヌの考え方などを紹介します。

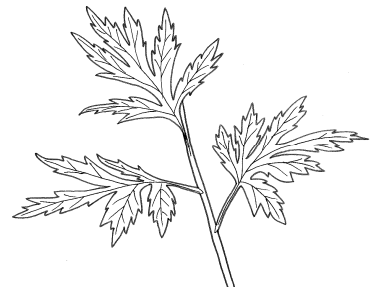


植物園内のハルニレの木々

2. オオヨモギ

日本に自生しているヨモギ属の植物は30種以上知られていますが、北海道でよくみられるのはオオヨモギ（別名エゾヨモギ、ヤマヨモギ、学名 *Artemisia montana*）です。オオヨモギはキク科の多年草で、本州近畿地方から北海道、南千島、樺太まで分布し、平地や山地の道端や空き地などにごく普通にみられます。地上茎は多数分岐して直立し、高さは1~2mになります。地下茎を横に伸ばして増えるほか、種子繁殖もします。葉は長さ15~20cm、幅6~12cmで、裏面に綿毛が生えていて、羽状に中裂または深裂します。よく似た植物にヨモギ（学名 *A. indica* var. *maximowiczii*）がありますが、ヨモギは九州から北海道石狩地方にかけて分布し、高さは0.5~1m、葉の長さは5~12cmとオオヨモギにくらべて小型です。

オオヨモギはアイヌ語で「ノヤ」といいます。アイヌの人々は葉を茹でてアワなどに混ぜてノヤシト（オオヨモギ・団子）にしたり、粥の上にふりかけてノヤサヨ（オオヨモギ・粥）を作りました。また、葉を煎じて咳止めや虫くだしにする、葉を揉んで傷口に当て出血を止める、虫歯に絞り汁を垂らしこんで痛み止めにする、枯葉を揉んでもぐさにするなど、さまざまな病気に対してオオヨモギを用いました。このように多くの薬効をもち独特の香りを放つことからカムイノヤ（神・オオヨモギ）とも呼ばれ、悪夢を見たときに茎葉を束ねて身体を^{はら}祓い清めたり、重病人が出たときにヨモギ人形を作ってそれに病人の着物を着せて外に捨てたりと、信仰や呪術にも用いられました。北海道各地にはオオヨモギに関する地名が存在し、例えば新ひだか町静内農屋（ノヤ）地区や、豊頃町農野牛（ノヤウシ、オオヨモギ・群生している・所）地区があります。このようにオオヨモギはアイヌの暮らしのなかで神聖で特別な存在であり、大切に扱われてきました。



オオヨモギ

オオヨモギは本園内の草本分科園と北方民族植物標本園で見ることができます。

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

<https://www.hokudai.ac.jp/fsc/bg/>

協力：北海道大学アイヌ・先住民研究センター

参考：分類アイヌ語辞典 植物編・動物編(1976)、コタン生物記 I 樹木・雑草篇(1976)、

日本の野生植物 草本Ⅲ(1981)、アイヌ植物誌(1995)、北海道山菜図鑑(2012)

3. アキタブキ

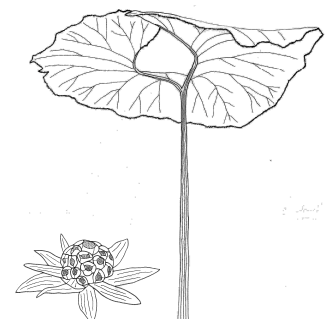
アキタブキ(別名エゾブキ、学名 *Petasites japonicus* subsp. *giganteus*)は、フキ(学名 *P. japonicus*)の亜種で、本州北部、北海道、千島、樺太に自生するキク科の多年草です。平地や山地の湿った場所や沢沿いにみられます。フキと比べて全体が大きく、葉の直径は1m以上、葉柄(茎のように見える部分)は長さ2m以上、太さ7cm以上になるものもあります。雪が解け地面が見え始める早春の頃、日当たりの良い地面から淡緑色のつぼみが顔を出します。これがフキノトウです。フキノトウが終わる時期になると、付近の地面から腎円形をした葉が出てきます。このため、フキノトウとアキタブキの葉は別の植物のようにみえるかもしれませんが、実は同じ植物で、地下茎でつながっています。フキノトウはアキタブキの花茎にあたります。

アキタブキは雌雄異株で、4~5月に開花します。雄株は結実せず、花茎はあまり伸びませんが、雌株は結実し、花茎の長さが1mに達することもあります。アイヌの人々の呼び方は植物学上の雌雄の分け方と逆になっており、花茎が長く伸びる雌株をピンネマカヨ(雄の・フキノトウ)、あまり伸びない雄株をマツネマカヨ(雌の・フキノトウ)と呼んでいます。

アキタブキの葉はアイヌ語でコルハム、葉柄はコルコニ(アキタブキの葉・もつ・木)といます。アキタブキは和ん文化では古くから親しまれている山菜のひとつですが、アイヌ文化でも生のまま食べたり、茹でて皮をむいて煮物や漬物などにしたほか、茹でたものを干して冬期の食料として蓄えたそうです。また、怪我をしたとき葉柄を噛んで傷口につける、風邪のときに煎じて飲む、葉で物を包む、雨傘に利用する、葉を何枚も重ねて鍋や小屋の屋根を作るなど、食用以外にも幅広い用途でアキタブキを利用しました。このように、アキタブキはアイヌの生活と密接なかわりがある植物のひとつでした。

アイヌの言い伝えにコロポックルという人物が登場します。コロポックルとは「アキタブキの葉・下の・人」という意味で、小人を想像されるかもしれませんが、アキタブキが2m以上に大きくなることを考えると、言い伝えのなかのコロポックルはアイヌの人々より少し小柄な程度であったのかもしれません。

アキタブキは本園内の北方民族植物標本園に植栽されているほか、池の縁や園路脇でもみることができます。

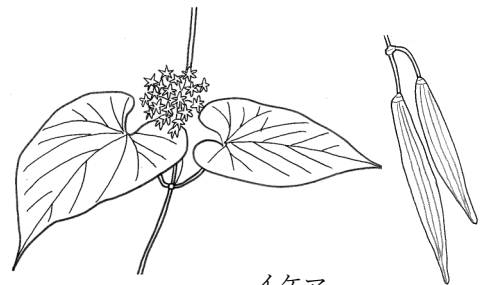


アキタブキ

4. イケマ

イケマ（学名 *Cynanchum caudatum*）は九州から北海道および南千島に自生するキョウチクトウ科の多年草で、やや湿った林縁や草地に生育します。茎はつるの状になって周囲の低木や草に絡みつきながら伸長します。葉の長さは5~15cm、幅は4~10cmで対生し、先のとがった卵形をしています。7~8月頃、葉の腋から伸びる花柄の先に小さな白い花を多数咲かせます。花が終わると、長さ約10cm、幅約1cmの紡錘形の果実をつけ、熟して裂けると白い毛のついた長さ7~8mmの種子が飛んでいきます。よく似た植物にガガイモ（学名 *Metaplexis japonica*）がありますが、イケマとくらべて葉はやや厚く、つるは太く、細く柔らかい毛が生えており、花は淡紫色で、大きな果実をつけるのが特徴です。

イケマという和名は、アイヌ語で「それ・の足」を意味するイ・ケマに由来します。「それ」は、カムイ（神）を敬い間接的な表現で呼んだものと考えられ、「足」は根を指しています。根は複雑に枝分かれして大人の親指ほどの太さになります。属名の *Cynanchum*（犬を殺すもの）が指すように、葉や茎、根を切ったときに出てくる白い乳液には、有毒のアルカロイドが含まれています。この強い毒性や独特の臭いがあるため、アイヌの人々はイケマを偉大な霊力をもつ植物として、さまざまな呪術的な用途に用いました。例えば、乾燥させたイケマの根を着物の襟や鉢巻に縫い込んだり、輪切りにして穴を開け、ひもを通して首にかけたりしたほか、病気が流行したときには嘔んで病人に吹きかけたり、家の入口や屋根に吊るしたりして人間に悪さをする霊を追い払いました。海に出て時化^{しげ}にあったときや濃霧につつまれたとき、根を嘔んで吐き出すと風が止み霧が晴れると信じられていました。下痢や腹痛、頭痛、虫歯、眼病になったときも根を利用しました。また、少量であれば中毒を起こさないので、アイヌの人々は春の芽出し前に根を掘り上げ、煮たり蒸し焼きにして食べました。このように、イケマはアイヌの人々にとって重要な存在であり、多くの家でイケマの根を乾燥させて蓄えていたそうです。



イケマ

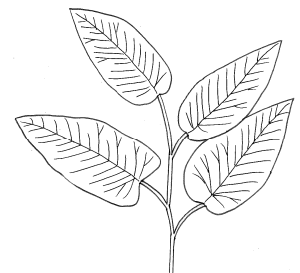
イケマは本園内の北方民族植物標本園でみることができます。

5. オオイタドリ

オオイタドリ（学名 *Fallopia sachalinensis*）は本州中部地方から北海道、千島、樺太にかけて分布するタデ科の多年草で、平地の道端や山地の林縁に群生します。地下茎は褐色で太く、横にはって広がります。地上茎は緑色か紅色で中空、高さは2～3mになって弓状に曲がります。葉は卵形で互生し、長さ15～30cm、幅10～20cm、基部は心形で葉先はやや尖り、裏面は無毛か短毛があり、白みを帯びます。8～9月、茎頂や葉腋に小さな白い花を密に多数つけます。雌雄異株で、雄株は花の集まりが上を向きますが、雌株は垂れ下がります。九州から北海道南部、朝鮮半島、および中国にはオオイタドリより小型のイタドリ（学名 *F. japonica* var. *japonica*）が生育していますが、イタドリの葉先は細く尖り、葉の裏は白くありません。また、近縁のウラジロタデ（学名 *Aconogonon weyrichii* var. *weyrichii*）は葉の裏が白くみえますが、綿毛が密に生えているため、見分けることができます。

オオイタドリの若い茎には爽やかな酸味があります。アイヌの伝統文化では、皮をむいた若い茎を生で食べたり煮て食べたりしたほか、クロユリの鱗茎と一緒に土を溶かした水でどろどろになるまで煮て鉢で潰し、油を加えて食べた地域もあったそうです。また、葉を刻んでタバコに混ぜて吸ったり、火であぶって柔らかくしたものを傷口に貼って傷を治したり、干した葉を尻ぬぐいにしたりしました。枯れた茎は丈夫なため、杖として使ったり、冬囲いの垣としても用いました。茎の中が空洞なので、吹いて音を鳴らして遊んだりもしたそうです。

オオイタドリは、アイヌ語でイコクツタル（節・多くある・中が空洞の茎）といいますが、単にクツタルということも多いようです。北海道内にはオオイタドリに関する地名がいくつかあります。例えば、白老町の倶多楽湖と窟太郎山、新得町屈足地区などがあげられます。イタドリは漢字で「虎杖」と書きますが、白老町の虎杖浜は、アイヌ語のクツタルシ（オオイタドリ・群生している・所）に由来します。



オオイタドリ

オオイタドリは本園内の北方民族植物標本園と草本分科園でみることができます。

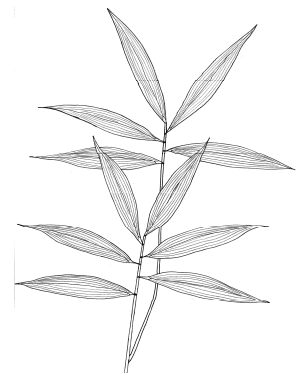
6. チシマザサ

チシマザサ（別名ネマガリタケ、学名 *Sasa kurilensis*）は北海道に自生する代表的なササ類のひとつです。本州の日本海側、北海道、千島および樺太南部に分布し、落葉樹林の林床にしばしば群生します。稈（地上茎）の直径は1~2cm、高さは1~3mで、稈の基部が湾曲して斜上し、上部で分枝します。葉は長さ18~28cm、幅3~5cmの被針状の長楕円形で、両面とも無毛です。北海道には、チシマザサに類似したササとしてはクマイザサ（別名シナノザサ、学名 *S. senanensis*）も自生していますが、クマイザサの稈は直径1cm以下で、基部でまばらに分枝し、高さ1~2mになります。葉は長さ10~35cm、幅5~8cmの長楕円形で、表面は無毛、裏面には柔らかい毛が密に生えています。チシマザサ、クマイザサとも北海道内に広く分布していますが、チシマザサは標高の高い所や雪の多い所によくみられます。

チシマザサはアイヌ語でオブネトプ（やがら 矢柄・になる・竹）またはルムネトプ（やじり 矢尻・になる・竹）といいます。地上に出たばかりの若芽を摘んで食べるほかに、硬くて軽い稈の特徴を生かして狩猟に使う矢の矢柄や、先を尖らせて矢尻として利用しました。稈を薄く削ってムックル（口で鳴らす楽器）を作ったり、葉で笹船を作って遊んだりもしたそうです。上川地方では、屋根や壁を葺くのにチシマザサやクマイザサの葉を用いました。材料としたのは、枯れたり虫が喰っておらず雪の下で2~3年越冬した状態の良い茎葉で、それらを束ねて平らに伸ばし、屋根や壁の骨組みに編み込みました。また、ササの葉を束ねた手草は、イヨマンテ（クマの霊送り）などの儀礼が執り行われる場所を清めるなど、さまざまな場面で用いられました。ニシン油の渋みを消すために葉を入れる、ササの実を食べる、魚を食べて中毒を起こしたとき葉を黒くなるまで焼いたものを飲むといったこともしました。

空知地方の浦臼町うらうすやオホーツク地方の旧生田原町いくたはらの名前は、アイヌ語のウラシナイ（ササの枝葉・川）およびイクタラ（ササの茎）に由来するという説があります。

チシマザサは北方民族植物標本園と自然林で、クマイザサは本園内の園路脇などいたるところで見ることができます。



チシマザサ